発話の統語構造に対応する言語外的要素に関する認知構文論的研究

岡久　太郎

学位論文の要約

本論文は、認知的構文文法 (cognitive construction grammar) の観点から、発話の統語構造に応じて変化する韻律とジェスチャーのメカニズムを解明することを目指した理論的・実証的研究である。全体は 7 章から構成される。

第 1 章では、導入として、言語外的要素に対する言語学の内外における伝統的な見方と近年登場した見方の双方について言及し、本論文の目的について述べている。伝統的に言語学内外において、言語外的要素は発話と密接な関わりがあることは指摘されてきたが、あくまでも発話に従属・付随する要素として扱われることが多かった。一方、近年になると脳神経科学や進化言語学の発展も相まって、言語学内外において言語内的要素と言語外的要素を統一的な観点から捉えることを目指した枠組みが提案されてきた。しかしながら、そのような枠組みにおいても人間言語の重要な特徴である階層性との観点から言語外的要素を分析する研究はほぼ行われていない。このような状況を踏まえ、本稿では統語的曖昧表現に共起する言語外的要素を構文として分析し、言語外的要素が統語・文法のレベルにおいても言語内的要素と結びついているのかを検討することを目的としている。なお、統語的曖昧表現とは「小さいバッグのポケット」のように、内部構造が 2 通りに解釈できる表現を指す。本論文では、「小さい」が「バッグ」を修飾する場合を「短単位修飾」、「（バッグの）ポケット」を修飾する場合を「長単位修飾」と呼ぶ。

第 2 章では、最初に認知的構文文法の理論的前提を紹介し、その枠組み内における言語外的要素を対象とした先行研究について概観した上で、本稿の位置付けと研究全体のリサーチクエスチョンを示している。近年多く見られる言語外的要素を構文として取り扱う研究は、特定の具体的な言語外的要素や言語表現に焦点を当てているため、あくまで語彙項目として機能する言語外的要素が記述されているのみで、伝統的に構文研究において明らかにされてきた統語的・文法的問題との関わりは考えられてこなかった。そこで、第 2 章の後半では、古くから発話の統語構造との関係が考えられてきた言語外的要素である英語の複合語に見られる強勢パターンをケーススタディとして取り上げ、認知的構文文法による言語外的要素の具体的分析方法を示している。さらに、統語を前提とした伝統的な説明と比較して、構文の観点からの説明がより適切に様々な事例を説明できることを主張している。

第 3 章では、日本語において発話の統語構造との関係が指摘されてきた言語外的要素であるダウンステップの生起とリセットを取り上げ、認知的構文文法の観点からの説明を試みている。英語の複合語と同様に、日本語のダウンステップの生起とリセットに関しても、統語構造のみから完全な予測を行うことは難しい。そのため、本章では聞き手にいかなる発話処理を求めるかという観点から、ダウンステップの生起とリセットの構文的機能を考える必要性があることを論じている。さらに、ダウンステップの有無に関する構文の機能については、これまでの先行研究だけでは複数の可能性が考えられるため、実験 1 において形容詞型（「マリは小さいバッグのポケットを探った」）、副詞型（「マミコはこっそり話している人を注意した」）、与格型（「コウキはケイコに上司が書いたメモを見せた」）の 3 つの統語的曖昧文を用い、その結果に基づいてダウンステップの生起とリセットの機能を規定している。また、実験 1 の結果において、与格型の長単位修飾型の解釈では他の文タイプよりも強調されたダウンステップのリセットが観察されたことから、発話の

内容に応じて、形式が異なる 2 つのダウンステップの生起とリセットの構文が考えられることを指摘している。

第 4 章では、これまで発話の統語構造との対応関係が部分的に指摘されてきたジェスチャーを取り上げ、統語的曖昧表現の発話において特定の傾向が見られるのかを検討している。先行研究においては、Talmy (1985, 1991, 2007) が提案する類型論的特徴である、移動イベントの経路を動詞によって表すのか、付随要素によって表すのかという統語的特徴がジェスチャーにおいても観察されるのかという議論が行われている。先行研究の結果、移動イベントの発話に共起するジェスチャーは話者の母語ではなく、実際に発話している統語構造に基づいて変化することが分かっている。さらに、統語的曖昧表現の発話に伴うジェスチャーを対象とした研究においては、ジェスチャーの生起タイミングが統語構造に応じて異なることが報告されている。これらの先行研究を踏まえ、実験 2 ではジェスチャーの内容に関しても統語構造に対応したパターンが見られるかを検討している。実験 2 の結果、統語的曖昧表現の発話においては、統語構造上の主要部をジェスチャーによって表す階層性に基づくパターンと、同一の形態のジェスチャーを繰り返すことで同時に発話した言語表現同士の関係性を明示する線条性に基づくパターンが見られた。これらのジェスチャーパターンは、先行研究において指摘されてきた日常会話に見られるジェスチャーとの連続性を有しており、より一般的なジェスチャーの構文からの拡張事例として考えられることを指摘している。

第 5 章では、統語構造に対応するイントネーションの構文と曖昧性を区別するジェスチャーが共起可能であるかを検討している。これまで、発話のイントネーションと身体動作には対応関係が見られるという報告がある一方で、単純にそれらが対応しているわけではないとする報告が共に存在した。本論文では、前者はイントネーションとジェスチャーが一体となった 1 つの構文として学習されたものであり、後者はモダリティごとに異なる構文として学習されたものであると分析することで、これらの結果を適切に捉えることができると主張している。さらに、実験 3 では統語的曖昧文の発話において、ダウンステップの有無による統語的区別とジェスチャーによる統語的区別が共起可能であるかを検討している。その結果、ジェスチャーが伴った場合には、発話のみに集中した場合に観察されたダウンステップの有無による統語構造の区別が阻害されることが分かった。実験 4 では、ジェスチャーによるイントネーションの区別の阻害が認知的リソースの観点から説明可能であるかを検討するために、単語を記憶しながら発話をする条件と無意味な手の動きを伴って発話する条件を追加し、イントネーションへの影響を検討している。その結果、単語記憶条件でも手の動き条件でもチャンスレベルと比較した時に、イントネーションによる区別が有意に見られた。以上の結果から、イントネーションによる統語構造の区別がジェスチャー共起によって阻害されるという事実は、認知的・運動的負荷の増大のみでは説明できず、イントネーションとジェスチャーが構文として同様の機能を有していることが原因である可能性が高いことを指摘している。

第 6 章では、第 2 章において行った構文の定義に基づき、話者の産出の観点のみからではなく、聞き手の理解の観点からも構文を捉えるために、統語構造に対応したイントネーションとジェスチャーを聞き手が話し手の意図通り理解することができるのかを検討している。先行研究において、ダウンステップの有無による統語構造の区別に関しては、聞き手も理解可能であることが報告されているが、ジェスチャーに関しては発話の途中段階まで曖昧性を有する部分的な意味的・統語的曖昧文の理解に関する調査しか行われていなかった。そこで、実験 5 では、イントネーションによって統語的曖昧性が区別されている発話とジェスチャーによって統語的曖昧性区別されている発話のそれぞれがどの程度聞き手に理解されるのかを検討するため、実験 3 で収録した音声と映像を用いた実験を行っている。その結果、イントネーションによる統語構造の区別は、先行研究では検討されていなかった統語構造を含め、高い正答率で聞き手が理解できていた。一方、ジェスチャーの共起した発話の映像を見た場合は、チャンスレベル以上の正答率ではあったものの、発話のみの音声

を聞いた場合よりも有意に低い正答率となり、映像のみを消去したジェスチャー共起発話の音声の正答率との差は見られなかった。この結果は、今回使用した刺激に見られるジェスチャーが発話理解に貢献していないことを示唆している。さらに、聞き手の理解に対する自信度の分布は、発話のみ音声、ジェスチャー共起映像、ジェスチャー共起音声のいずれの刺激を呈示された場合も同様であることから、イントネーションとジェスチャーが及ぼす発話理解への影響の差異は聞き手に自覚されていないことが示唆された。

第 7 章は、前章までの内容を総括し、本論文の意義と今後の展望について述べている。本論文における各議論は、発話の前提としてその統語構造を想定し、それが言語外的要素に反映されるという伝統的なアプローチによって言語外的要素を正確に記述・説明することが難しいことを一貫して示しており、本論文で採用した認知的構文文法のアプローチのように、言語外的要素を発話の統語構造とは独立に扱うことのできるモデルが不可欠であることを主張している。また、本論文は韻律とジェスチャーという複数モダリティの相互作用や関係性を検討している点で、先行研究にはない独自性を有すると言える。さらに、今後の展望として、本論文で提案した言語外的要素を形式極に含んだ構文がいかに実際の言語使用において活用されているのかを検討する必要性があることを述べている。